

行動力必要な日本



国家基本問題研究所理事長

櫻井よしこ氏

さくらい・よしこ ニュースキャスターを経て2007年「国家基本問題研究所」を設立。「エイズ犯罪 血友病患者の悲劇」で大宅壮一ノンフィクション賞受賞。「日本の危機」で菊池寛賞受賞。

中国の軍備増強を懸念

国際秩序の変化は、米国の力の相対的な衰退と、中国の力のめざましい台頭により起きている。インド洋で緊張が起きていく背景には、中国がシーレーンを確保すると同時に、インドに対する並々ならぬライバル心を抱いているからではないか。印度洋、アジア地域全体に、不安定さが増している。一方で、権力が（中国のある）東方に大きく移りつつある。昔は経済が大きくなれば政治もオーブンになった。大きな疑問は、（中国が今後）開放なか、閉鎖なのか、どちらに向かっているのか、どんな大国になると考へか。

櫻井よしこ 現在起きている

の胎動により、アジアの覇権争いはその舞台を太平洋からインド洋へ移しつつある。新たな戦略の求められる時代にあるべき日米関係とは。数々の政策提言を行つてきたシンクタンク「國家基本問題研究所」（櫻井よしこ理事長）が、日本、米国、インド、中国の専門家を招いた初の国際シンポジウム「インド洋の覇権争い—21世紀の大戦略と日米同盟」（産経新聞社後援）を開催した。中印の譲らない牽制合戦、米国の現実的な視点、そして日本の問題点が改めて浮かび上がる。

中国は「海洋强国」で、九州から沖縄、台湾、フィリピンの第一列島線と、小笠原からグアム、サイパンを支配するパターンで南シナ海を制すと予言した。それを証明するように、中国海軍首脳は一昨年、「米国がハワイの東、中国がハワイの西とインド洋を支配すればいい」と発言した。

中国は92年の領海法で南沙、西沙諸島の領有を宣言。その後、海洋調査を行い、「民間人」が上陸して実効支配権を確立した。これらはすべて平時に行われている。中国には戦わずに影響力を拡大する傾向がある。

中国は「海洋强国」で、九州から沖縄、台湾、フィリピンの第一列島線と、小笠原からグアム、サイパンを

インド洋の覇権争い —21世紀の大戦略と日米同盟

基調講演



防衛政務官

長島昭久氏

ながしま・あきひさ 民主党衆院議員（当選3回）。慶應大修士、米ジョンズ・ホプキンス大修士課程修了。外交問題評議会で日本人初の上席研究員（アジア政策担当）を務めた。



日米同盟50年で論じるべき視点は、「米中の変化に国際社会がどう対処するかとの問題意識だ」と櫻井理事長は提起した

領海問題は日本にとって深刻だ。

体制問題では、中国共産党は一党独裁体制をとりながら、社会主義市場経済という旗幟があり、中産階級も出てきた。では複数政党制になるかといえば、そうではない。また軍事では、中国はとてつもない軍事力を持つ。軍事力は外交力に翻訳され化けてくる。軍事力の前にたじろぐ国は、大変な不利益を被ることになる。

楊先生は、中国のインド洋、東シナ海での軍拡問題に関する問い合わせられない。台湾に何か起きたかもしれないという懸念。1990年代半ばには、いくつかの小さな危機が攻撃するというのか。

楊先生は、中国の人民解放軍に役割を果たしてもらいたいと考えている。平和維持活動への参加などだ。また、中国の軍備は、他の国々と比べれば最先端の機械が台湾海域で起きた。米国は中国の人民解放軍に影響を持つわけではない。戦闘機では第3世代のものを使っており、他国は第5世代だ。ミサイルの精度も不十分だ。給料も改善の必要があった。以前の人材支援協力も必要だ。四川地震の際、墜落したヘリを探すのに

責任果たす態勢作りを

通る第二列島線を規定。2010年までに第一、20年までに第一列島線の内側の制海権を確立し、40年までに西太平洋で米海軍の制海

と対等な海軍になろうとしている。自國向け石油の80%が横切るインド洋は、中国にとって援助をしてきた。目的は①マ

ラッカ海峡を通過せず直接、本土へ物を運ぶこと②インド洋を牽制すること③インド洋を制することだ。

インド側も今後数年間で海軍に300億ドル以上の予算を使うなど中国を牽制しているが、多国間シンポジウムや海上自衛隊の補給艦を撤退させた。

日本も印度洋の安全保障には重大な関心を持っているが、多国間シンポジウムや海上自衛隊の補給艦を撤退させた。

一日も早くプレゼンス（存在）を回復しなければならない。将来的には、西太平洋では米国と協力を密接化し、海上阻止活動、公海上での船舶検査などの法整備もして日本が責任を果たす態勢を作つていただきたい。

櫻井よしこ 経済と安全保障は分けて考える必要がある。中国はネット規制やケーブル問題にみられるように、心の自由、思考の独立しているのではなく、開放されている。

田久保忠衛 中国には領土問題、体制問題、軍事問題がある。インドと中国はヒマラヤ近辺の国境をめぐり激しく対立している。日中間には、東シナ海の中間線そばに「白樺」（中国名は「春曉」と呼ばれる天然ガス田がある。中国との領土、

2週間、1万人を動員して